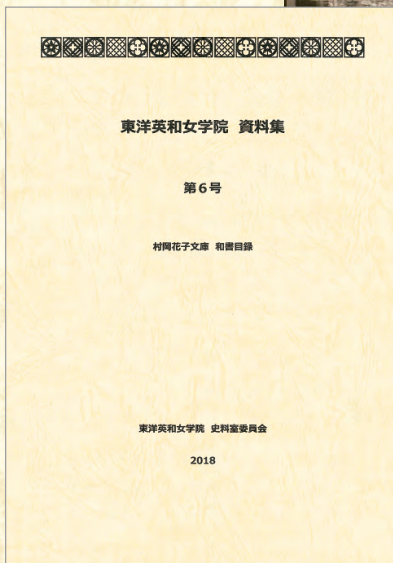




東洋英和女学院

史料室だより No.92

2019.5.10 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



村岡花子文庫 和書目録が刊行されました

史料室委員会では、今年の3月に『東洋英和女学院資料集第6号 村岡花子文庫 和書目録』を刊行いたしました。本校の卒業生であり、翻訳家・児童文学者である村岡花子の蔵書は2014年度に学院に運び込まれ、その蔵書コレクションは村岡花子文庫として、和書が約1200冊、洋書が約800冊におよびます。目録は学院各部の図書室・図書館、展示コーナーにございますので、是非一度お手にとってご覧ください。

目次

特集	村岡花子 没後50年記念特集 (3)	
	記録短歌への道 — 歌人 村岡花子を考える—	
	歌人 三枝 昂之氏……………	2
〈資料紹介〉34	「雑記帖 その三」(後編)	
	—村岡花子二十歳、芸術への思い、翻訳者への道— 神藤 真理……………	6
おしらせ	……………	9
〈東洋英和の先生がた〉2	小野寺昭夫先生	
	校庭のイチョウの木のように……………	10
学院資料展示コーナーご案内……………		12
史料室から、ごさげんよう	かつて「ネクタイはブルー」だった? ……	12
利用統計/史料室の活動より (2018年10月~2019年3月) ……		13



記録短歌への道 —歌人 村岡花子を考える—

三枝 昂之

（一）「心の花」へ

村岡花子というとなんでもまず思い浮かべるのは『赤毛のアン』など外国文学の翻訳者花子だが、実は歌人でもあった。私から見ると翻訳家花子は歌人花子から生まれたと言いたいほどに花子の発端にある短歌は創作の原点としてとても大きい。その道筋をたどりながら、花子の短歌を楽しみたい。

（二）発端

花子は明治26年6月21日、甲府市に生まれた。2歳のときにカナダ・メソジスト派の甲府教会で幼児洗礼を受けたことは花子のその後の大切な布石となっている。5歳のときに一家で東京に移住した花子が、10歳で給費生として東洋英和女学校に入学を許されるのは、メソジスト派教会で洗礼を受けたことと無縁ではない。

明治33年、花子は7歳のときに大病をした。「学校も長く休み、ずいぶん両親に心配をかけた」（村岡花子『改訂版 生きるということ』、以下『生きる』と略記）と花子は振り返っている。病名ははっきりしないが大病の中で花子は死を覚悟し、短歌を詠んだ。

まだまだと 思ひて過ごし をるうちに
はや死の道へ 向ふものなり 安中はな

辞世ともいうべきこの歌、私の人生はまだまだこれからと思っていたのに早くも死が近づいてしまった、と嘆いている。7歳の少女がなぜ辞世の歌を詠むことができたのか。



花子9歳の頃（前列左）。一番右が父親の安中逸平

幼い頃、家の床の間に短冊が掛かっており、父の逸平が読んで聞かせた。意味も分からないまま花子が耳で覚えたそれが平忠度の「さざなみや 志賀の都は あれにしを むかしながらの 山桜かな」だった。来客があるとその短冊を読み上げ、驚嘆されて得意にもなった、と花子は振り返っている（『生きる』）。

その体験が短歌のリズムを花子の心に根付かせ、7歳の辞世となったのではないかと。忠度の歌に導かれて辞世の歌を詠む。この体験も大切な布石である。

（三）出会い

花子が東洋英和女学校に入学した5年後の明治41年、柳原燐子（白蓮）が編入学、同級生となった。これが花子の中の短歌への関心と呼び覚ますきっかけとなった。花子は燐子の紹介で佐佐木信綱の指導を受けて「心の花」で活動を始める。燐子と花子、それぞれの「心の花」初掲載作品を紹介しておこう。

怖ろしき 毒矢のがれて そゝろにも
涙こぼるゝ 此夕べかな

燐子（43年8月号）

雲ちわき 峯のいたゞき 天地に
心の倦の われをおぼえぬ

花子（43年11月号）

燐子の歌は私的データを重ねると、離婚して北小路家の嗣子資武から離れたときの安堵感と読むことができる。花子の「ちわき」は動詞「道分」の連用形だろう。空を押し分けるように湧きあがる雲の峰に触発されて対比的な自分の倦む心を見つめている。

村岡恵理『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』によると、花子と燐子は毎週火曜日の放課後、本郷西片町の佐佐木信綱邸に通った。持参した短歌の指導、『源氏物語』や『万葉集』の講義も受けた。毎週の作品は「十数首」となかなか多作である。

そうした中で信綱は花子の英語力に注目、森鷗外訳『即興詩人』（アンデルセン作）を渡し、愛弟子の片山廣子を紹介する。廣子は花子にとって「心の花」の先輩歌人であるばかりでなく、東洋英和の先

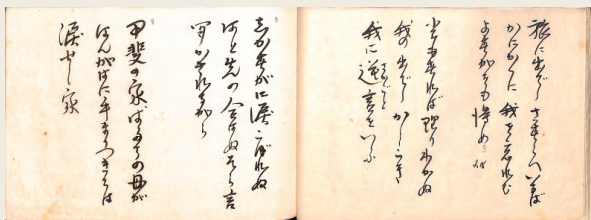
(五) 歌稿「ひなげし」

歌人花子を考えるときに歌稿「ひなげし」は特に大切である。これには大正3年3月8日から5月15日までの詠草から、133首と追悼の詩1編が収められ、すべて三行で表記、歌論やエッセイの類はない。

- ④ しみじみと 行末なども／
思ひ見つ はたちを一つ／越えつる朝
- ⑤ 横町の 父のなき子も／
下駄はきて 遊びに出づる／初春なれば
- ⑥ 甲斐の家 はたちの母が／
えんがはに 手まりつきては／涙せし家

④には「四月八日 満二十一歳の春を迎ふ」と脚注があり、大人への一步を踏み出した節目のごく自然な感慨、⑤はふと目にした風景のありのままのスケッチだが、横町の子という近さと下駄が当時の暮らしぶりをよく生かしている。⑥は幼い頃の風景の回想。なぜ母は涙を流していたのか。分からないまま記憶に刻まれた遠い日を想い出している。

歌はごく日常的な感懐を伝えており、比喩的にいえば体温36度の平熱の歌である。「短歌ノート」から「ひなげし」へのこうした変化にはなにが作用したか。



花子の歌稿「ひなげし」。この時期、花子の歌は大きな変化をみせる。
(画像提供 山梨県立文学館)

まず三行書きから見えるのは石川啄木の影響である。花子が「ひなげし」を書いた大正3年は啄木人気が広がった時期であり、しかも三行表記と暮らしに近い内容。啄木の影響は視野に入れておくべきだろう。

もう一人影響を思わせるのは与謝野晶子である。花子の資料に「村岡花子雑記帳」の1と2があり、明治44年から45年のもろもろを記述した雑記帳1の45年5月には与謝野晶子『春泥集』の評があって、



東洋英和女学校卒業後の花子（一番右。大正3年のほうがきより）。「ひなげし」の歌を詠んでいた頃

これが大変興味深い。『春泥集』は晶子の第九歌集、明治44年の刊行である。その引用歌と花子のコメントを紹介してみよう。

戸に寄りて 藁の管より 息を吹く
童^{わらは}きたりぬ きさらぎの春 晶子

花子：何と言ひ知らねどのどげさ思はするが
嬉し、この歌春精をば秘ませ居るにや？

わがはした 梯子の段の 半^{なかば}より
鉄おとせし 春の晝かな 晶子

花子：スケッチ風の歌。或家の春の気分活躍せり。

場面と動きがよく見えてくる歌で、「スケッチ風の歌」という花子の評は的確だ。ここにはスケッチ風の歌に共感し、その魅力に開眼してゆく花子がいる。

(六) 記録短歌

大正8年、花子は仕事を通じて知り合った福音印刷の村岡徹三と結婚、翌年長男道雄が誕生、27歳の母となった。しかし道雄は満6歳直前の9月1日に疫痢で急死した。子を得た喜びと失った悲痛。その心を花子は短歌に託した。大正15年12月発行の歌文集『道雄を中にして』に収録された「七年の追憶」がそれである。

⑦ おろかなる 我をゑらびて あめつちに
ひとりの母と あぶぐや^{なれ}汝は

⑧ たらちねの 母と呼ばれて この家に
我がさいはひは 満ち足りにけり

二首には「九月十三日午前五時四十五分男児出生、

勢よく挙げし泣声を聴きて、嬉しさいとほしさに涙禁めあへず」と詞書がある。素直な表現からは母となった喜びがよく伝わってくる。⑦の「おろかなる」は自分を低めることによってわが子への感激を大きくしているのである。⑧は周囲から「お母さん」と呼ばれるようになったことへの感激。



花子と早世した息子の道雄。花子は愛児との思い出を歌に託した。

しかしながら大正15年に道雄は病いに倒れ、9月1日に世を去る。それを受けて次のように詠われる。

- ⑨ 汝やそも 年の六とせを かりそめに
あづけられたる 珠玉なりしかも
- ⑩ よその子等 いくたり見るも 母は泣かず
眼にまざまざと 吾子の映れば
- ⑪ 町行けば 子供服のみ 眼に映る
吾子なりし日の かなしきおもひで

道雄は私に6年間だけあづけられた宝だった。⑨無理にそう自分を納得させ、⑩で「母は泣かず」と耐えながらも心の中では泣いている。⑪は道雄がい

た時のかけがえのない幸福感。だから今は切ない思い出になる。

『生きる』で花子はこれらの歌を振り返りながら次のように語っている。

「全然巧んだところのない、実感そのままであるために、二十数年をへだてた今なお、当時の自分に対して好ましさをおぼえることができる。」

「今手許にあるこれらの歌は、その当時のいわば「記録短歌」である。亡き愛児は生きていればもう二十八になる。」

実感そのままであるために当時が永久保存される。これは短歌にとって大切な考え方である。俵万智の歌を思い出してみよう。

「この味がいいね」と 君が言ったから
七月六日は サラダ記念日 俵万智

手作りのサラダを振る舞って、それを恋人がほめてくれた。ごく平凡な内容だが、その事実が短歌になるとある日の喜びの記録として永久保存される。今の短歌も作者の現実を反映した記録短歌であり、それを〈暮らしの中の折々の歌〉と言い換えれば、それこそ今日なお短歌のもっとも基本的な領域である。

「記録短歌」の考え方に通じる花子の言葉を、エッセイ集『をみななれば』の「身近にある美しさ」から紹介して終わりたい。

「美を発見し、それを愛し、喜び、たたえることのできる感受性というものは文化人の素質の一つであることを忘れてはならない。しかもその美は決してりっぱなものや遙かかなたに求めるべきではなく、毎日暮らしてる身近なところにいくらでも見出せるのである。」



〈執筆者プロフィール〉

三枝 昂之（さいぐさ・たかゆき）

1944（昭和19）年 山梨県生まれ。

歌誌「りとむ」発行人。日本歌人クラブ会長。山梨県立文学館館長。

宮中歌会始選者。日本経済新聞歌壇選者。歌集『それぞれの桜』ほか。

歌書『啄木再発見』、『昭和短歌の精神史』ほか。

芸術選奨文部科学大臣賞、紫綬褒章ほか。

〈資料紹介〉 34

「雑記帖 その三」(後編)

—村岡花子二十歳、芸術への思い、翻訳者への道—

神藤 真理

〈芸術への思い、人生観〉

今回も前編に引き続き村岡花子の「雑記帖 その三」を取りあげる。雑記帖の1ページ目は次の英文で始まっている。

“Clearness in thought and words ought to be a part of a writer’s religion.”

(思考や言葉の明確さは作家の信仰の一部でなければならない)

※下線は原文の表記による。筆者訳。以下訳文は筆者による。

このあとも以下のような英文が続く。

“He whose eyes are steadily fixed on the beautiful always loves, and is always young.” (絶えず美に魅せられている者は、常に恋をしているようで若々しい)

Why do we faint or fear to live alone/
Since all alone (so Heaven hath willed)
we die? (死ぬ時は一人なのに(天が決めたように)、なぜ我々は一人で生きること気乗りしなかったり怖れたりするのか)

それに続いて短歌が挿入されている。

石の床、石の枕に旅寝して
過ぐるに 似たり あはれ人の世。

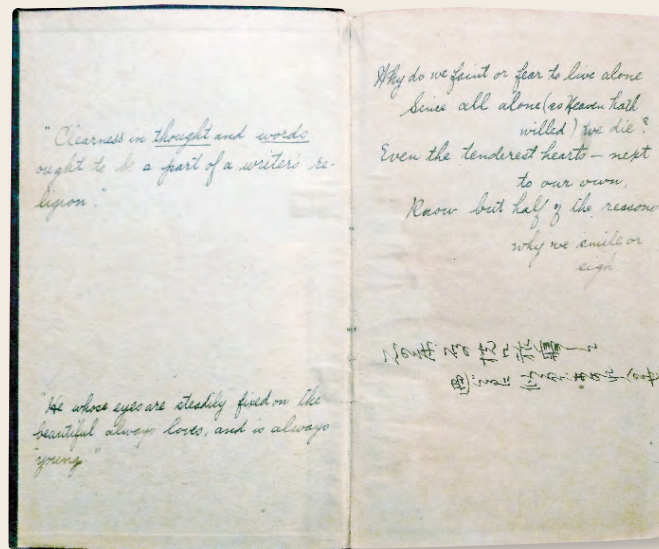
さらに “There is no discord between my art and my life.” (私の芸術と私の人生の間に不和はありません) と記され、続いて [ガブリエル?] ダヌンツィオの英文が引用され、3ページの終わりには

我れ死なば 詩のみ神の御胸に
永久の寵児と 抱かせたまへ。

と二首目を詠んでいる。東洋英和女学校の高等科を卒業した直後の20歳の花子の高揚感、人生観、芸術への熱い思いが伝わってくる。

〈万葉集とテニス〉

2018年10月13日、村岡花子記念講座(港区・東洋英和女学院連携事業)「短歌・佐佐木信綱門下と「心の花」—花子と白蓮、片山廣子がいた時代—」と題して佐佐木幸綱氏による講演が行われた。聞き手として登壇していた村岡恵理氏が紹介した資料に



雑記帖の冒頭ページには英文と和歌が並んで記されている。

「熱情と勇気と哀れさと一万葉集とテニス」(日本文学全集編集委員会編『わが青春の文学』所収)という村岡花子の文章があり、花子は「私は若いころ、万葉集とテニスを熱愛した。」と述べている。花子にとって、青春を象徴する本が万葉集とテニスであったことがうかがわれる記述が、雑記帖にも数箇所見られる。たとえば[1913年4月?]22日には、

朝テニソン (注:「雑記帖その三」では「テニソン」と表記)の「二つの声」を庭で読んで室に帰へつて来たらば机の上に桜草の花びらが一つこぼれて居た。

春風に こぼれし花の 情をも
いたましさと 人は泣くらん。
九時半。

[1913年?]6月[5?]日には、「東様へ、御姪御の死をきゝて」のなかで、

生は神秘なり、死も亦神秘なり。而してこの二者の間に多くの疑惑と困難とを湛へて横はれるは即ち生存といふ高原なり。

と、テニスの詩句を引用している。花子の日常にはテニスの言葉が息づいていて、その言葉に花子は自身の思いを重ね、感じ、思考し、ある時には短歌として表現している。

『万葉集』も(日付はないが、その前のページの日付は[1914年?]2月4日となっているのでその時期に書かれたものか)、柿本人麿、春日蔵首老、石上乙麿らの7首が書き写されている。いずれも旅の歌。旅情、旅の途で、ふるさと、家族を恋う歌に

ひかれているように感じた。

〈花〉

花子は花を愛好し、雑記帖でも花についての記述が散見される。1913年5月3日、

私は一生花にかこまれて暮らさう。人の情を伝えてくれるのは花だ。どうしても自分はこの花に愛されて居るやうな気がする。だから私も花の世話をしてやるのだ。

5月6日には、「萎れかゝつたばら」を髪に挿しているのを「かつぢさん」に指摘されると、

「エ、萎れかゝつたからさしたのよ、盛りに咲いて居る時にはどうしても可哀想でさせないの、ですけど、どうせもう明日になれば駄目になるでせう、(中略)「花さん」の髪をかざつて死ぬのなら却つて「花」も喜ぶだらうと思ふの。」

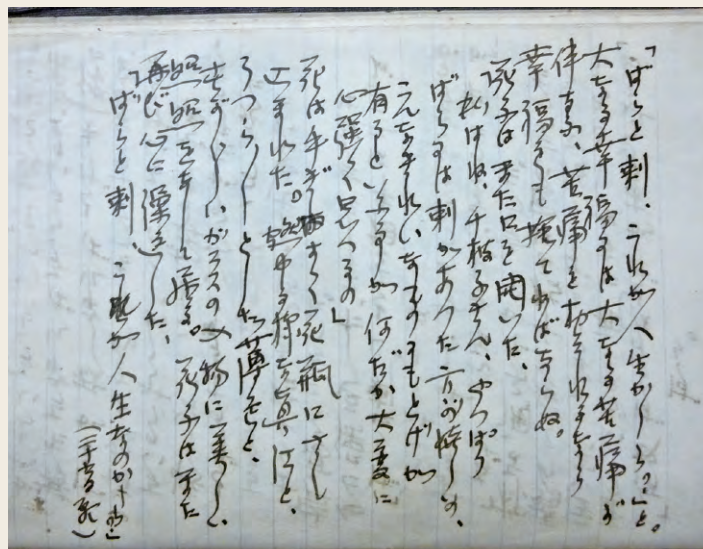
5月25日には「千枝子さん」に薔薇について語る。

「私はね、この花にとげのあるといふ事がたまらなく嬉しいの。」

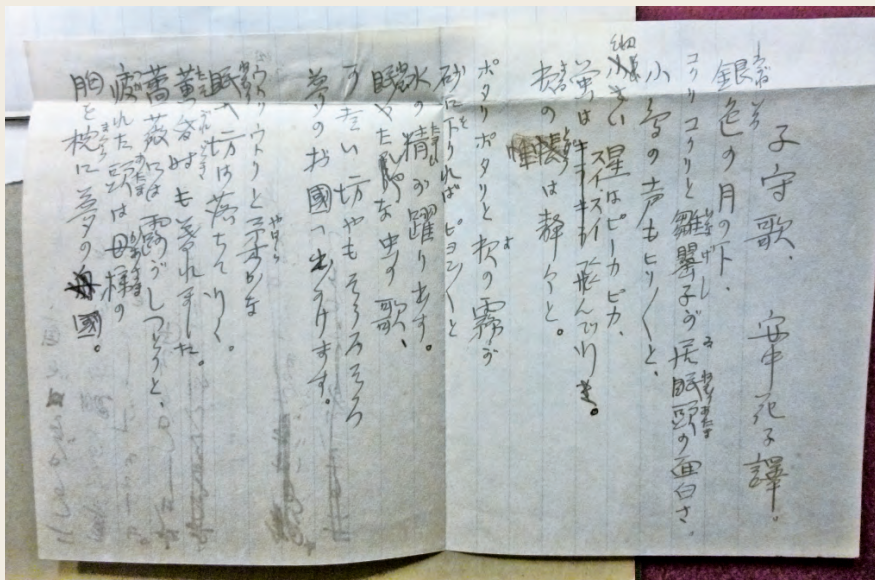
そして刺のない薔薇はどこを探しても無いと語り、

大なる幸福には大なる苦痛が伴なふ、苦痛をおそれるなら幸福をも捨てねばならぬ。

と記している。このくだりなどは、『赤毛のアン』のアンを彷彿とさせる。



「花」についての箇所。薔薇について語りつつ、花子の人生観が綴られている。



「安中花子訳」と明記された翻訳の詩「子守歌」が雑記帖の最後に貼り込まれている。

花子は自身の机上の花を絶やさなかった。[1913年?] 10月19日には、

「花を絶やすまる」との心のちかひが守られて居る事が嬉しい。小さいちかひでも、それを自分で守りおほせる事は満足だ。

と記している。

〈翻訳〉

[1913年?] 11月頃から翻訳と思われる文章、詩、童話などが書かれるようになる。しばらく雑記帖への書き込みをしておらず「大正3 [1914] 年はじめての書きものだ。」と [1月?] 19日に記されているのは、「ジョン・アデングトン・サイモンドス」(注: John Addington Symondsは英国の詩人で文学評論家。1840-1893) についての「アーサー・シモンス」(注: Arthur William Symons英国の詩人、文芸批評家、雑誌編集者を指すか?) による評伝を花子が訳しているらしい文章が続く。何故花子はこれを記したのかと考えた時、翻訳文の後に添えられた数行の花子の感想が目にとまった。

このSymondsの伝を読んで私はたまらなく妙な心地がした。まるで自分の将来までも見通した様な気がする。自分に余りに似たところがあるからだ。

とあった。評伝の最後には

「実際サイモンドスは学者でもなければ芸術家でもなかった。彼は唯文学を文学として愛好し、

修養の一段階として学者たらんことを望んだのであった。」

との記述がある。この時期、花子は

歌も出来なければ文章はテンデ書かないし、自分ながらどんなになつてしまふのかわからない。

という状態であった。花子もまた自身の資質に悩み、今後の進むべき道を模索していた。

雑記帖の終盤は、「銀のお使」(童話)、「お嫁にもらつてくれなくば」(詩)、「子供の歌」(詩)、「子守歌」(詩)と、次々に書かれている。「子守歌」にはタイトルの下に、「安中花子訳」と書いてある。いずれの作品も子どもたちに向けた心温まる内容である。特に名前を掲げた「子守歌」の邦訳は、擬音語、擬態語が美しい響きを醸し出し、眠りに誘う優しい世界を創りあげている。この「子守歌」で「雑記帖その三」は終わる。

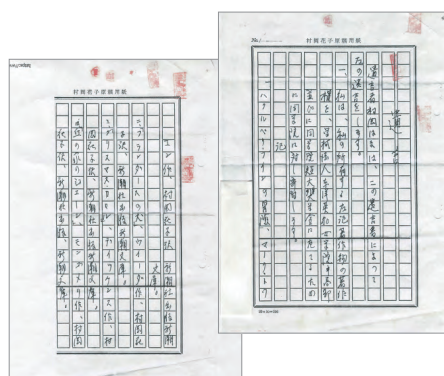
〈終わりに〉

文学者としての花子の才能は翻訳家として発揮された。数々の名作を産みだしていった花子の才能の芽は「雑記帖その三」のなかにも随所に見受けられた。「大なる幸福には大なる苦痛が伴ふ」という花子の言葉通り、さまざまな苦悩を経験するなかでも、芸術とは何かと希求し、日常を自身の言葉で豊かに鮮やかに彩っていく感性は、彼女の作品の登場人物たちのように、生き生きとして生命力に溢れていた。

(かんどう まり 中高部国語科教諭・史料室委員)

村岡花子の学院への寄付と著作権の延長

村岡花子は4作品の文庫本の印税を、母校である東洋英和女学院への寄付とすることを遺言に書き残していました。本来であれば2018年12月31日にその著作権は切れるはずでしたが、TPP（環太平洋連携協定）締結により保護期間が20年延長されることになりました。村岡花子による学院への貢献は継続されます。



村岡花子の遺言状（一部）

学院創立135周年・大学開学30周年記念事業 村岡花子記念講座のご案内

港区と東洋英和女学院の連携事業として開催されてきた村岡花子記念講座は、2019年度は周年事業の一環として開催されます。ふるってご参加ください。

※開催日により講演時間と会場が異なります。ご注意ください。

◆第1回 2019年11月16日（土）14時～16時 大学院棟201教室（六本木校地）にて

「カナダの日系人強制収容所における

東洋英和宣教師の教育支援活動について」

講演：溝上 智恵子 氏 筑波大学図書館情報メディア系長 教授

◆第2回 2019年12月7日（土）※同窓会クリスマス礼拝終了後14時30分～15時40分

中高部 新マーガレット・クレイグ記念講堂（六本木校地）にて

「本・子ども・絵本」

講演：中川 李枝子 氏 作家、『ぐりとぐら』シリーズなど子どもの本の著者

◆第3回 2019年12月14日（土）14時～16時 大学院棟201教室（六本木校地）にて

「建築家W.M.ヴォーリスと東洋英和女学院」

講演：芹野 与幸 氏 (株)一粒社ヴォーリス建築事務所顧問、(公財)近江兄弟社嘱託研究員

◆第4回 2020年2月22日（土）14時～16時 大学院棟201教室（六本木校地）にて

「日本の近代を全力で駆け抜けた颯爽たる女性 広岡浅子」

講演：小川 琢磨 氏 大同生命保険株式会社執行役員



定員 各回200名 **料金** 無料 **申込方法** メール・FAX・往復ハガキにて事前申込制、先着順
<ご記入事項> お名前・ご住所・電話番号・希望の回（複数回可）

申込期間 6月以降、申込受付開始予定。締切は原則として各回開催日 2 週間前まで。

詳細は生涯学習センターHPにてご確認ください。

※同窓生の皆様へ 第2回中川氏の講演会は、同窓会クリスマス礼拝に出席される場合申込不要です。

（一般の方々と同様に、講演会から参加される方のみ生涯学習センターへお申込みください。）

共催：港区麻布地区総合支所

●お問い合わせ：東洋英和女学院大学 生涯学習センター 〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町32

TEL: 045-922-9707 / FAX: 045-922-9701 / E-Mail: shougaictr@toyoeiwa.ac.jp

〈東洋英和の先生がた〉2 小野寺昭夫先生

校庭のイチョウの木のように

小学部の先生がたの回想

小学部に20年間在職された小野寺昭夫先生と聞いて、いつもスーツに身を包むダンディな姿を思い浮かべる方も多いであろう。現在の小学部には、小野寺先生から指導を受けた当時の教諭もいれば、卒業後教諭となった教え子もいる。それぞれの目から見た小野寺先生の思い出をお尋ねした。

ある教諭は高学年の思い出として「江良頭三郎部長先生、秋月徹部長先生のそばで教頭先生として立っていてくださる姿が印象的」「5、6年生の時、担任の先生の代わりに国語の授業にいらしてくださいました。教頭先生が国語を教えてくださいまして嬉しかったことを深く憶えている」と、「教頭」としての立ち姿と、自ら教壇に立たれる姿の対比を述懐している。

一方で、当時の新任教諭（現ベテラン）は、「授業内容だけではなく、板書の文字、器具の汚れ、言葉遣い、プリントに至るまで細かいところまでご指導くださったことが、今の土台となっている」と語る。PCのない時代に大きな統計用紙を何枚も合わせて作られたカリキュラムやコース別表など、どれもよく考えられたものであり、郊外学習でのその学年に合わせた解説には自分が勉強させていただいた、と小野寺先生の教師としての技量に敬意を表している。3年生の社会の授業、専科教員のための聖書研究もよく準備していらしたという。ほかの教員は「私の結婚式するとき、当時まだ珍しいビデオカメラ（テレビ局のカメラマンが肩で担いでいるほどの大きさ）で撮影し、後でVHSのテープをくださった」と述べており、視聴覚教育を得意分野とされていた



職員クラブのあと（1976年）。小野寺昭夫先生（前列右から3人目）、江良頭三郎先生（同6人目）、秋月徹先生（同7人目）

ことが伝わってくる。

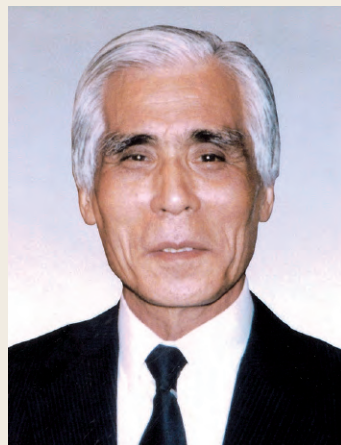
また小野寺先生は「気さく」な先生で、「廊下で出会う子どもたち一人ひとりの名前を呼んで声をかけ、子どもたち一人ひとりの家族のこともよくご存知だった」。修学旅行先ではこんなエピソードもある。「誰にでも親しく声をかけられる上に、あまりにもよく働いてお世話をし、動いていらっしやるので、ホテルの方が先生を用務員さんだと思っていたくらいだった」。自ら進んで人に尽くす姿は、のちに先生が歩まれる道を示唆しているようにも思える。

最後に、前出の現ベテラン教諭は、1985年3月に行われた送別式での6年生の言葉が忘れられないという。「小野寺先生は校庭のイチョウの木のように大きくて、いつも私たちを見守ってくださった」。15年にわたり教頭としての役目を果たされた先生は、児童にとっても、ほかの先生がたにとっても、大きな存在であった。

二つの「百年史」

小野寺先生が退職される前年、1984年に学院は創立百周年を迎えたが、先生は年史編纂や記念事業に多大なる貢献をされた。特に『東洋英和女学院百年史』の小学部パートの執筆については、教務全体を把握していたであろう小野寺先生がご担当となった。第6章第4節「小学部」の項のうち約4分の1は、キリスト教教育についての記述がなされ、学校におけるキリスト教教育の現況から教会学校との関わりまで、細かく分析された図表で示され、現在にもつながる課題があぶり出されている。

その後1990年、同じく百周年を迎えたのが銀座教会で、小野寺先生は『銀座教会百年史』の執筆や写真撮影・写真提供にも尽力された。この二つめの百年史の編纂において、岸憲秀神学生（当時）との出会いがあったのは、大なる神の導きであろう。先生が『百年史』と平行して、『昼の銀座に鐘が鳴る この地には私の民が多く居る —正午礼拝 小史—』をまとめあげられたのも特筆すべきことである。



学院資料展示コーナーご案内

1989年に東洋英和女学院大学が開学してから今年で30年になります。今回の企画展では大学開学までの道筋を、史料室所蔵の資料からたどっていきます。

<2019年6月スタート 企画展>

東洋英和女学院大学

開学30周年記念企画展示

三保の森にキャンパスが誕生するまで

—資料にみる開学までのあゆみ— (仮)

会期：2019年6月18日～2020年2月1日



【学院資料・村岡花子文庫展示コーナー】

入 場 料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。

展示場所：東洋英和女学院 六本木校地 本部・大学院棟1階

公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00（土曜日は～19：00）



史料室から、ごきげんよう



かえでくん

小学部で話題沸騰、かつて「ネクタイはブルー」だった？

昨年2018年度の小学部創立記念日礼拝で「英和を支えたカナダの人びと」と題して、元史料室担当の酒井ふみよ氏がお話された時、「最初は、ネクタイの色はブルーだったようですよ」という話題が出ると、小学部生の間でどよめきがありました。おなじみのガーネット色のネクタイが青かったなんて…。

実は、現在の制服が決まるまでには、さまざまな試行錯誤があった様子です。1928年5月22日の「教員会議録」によると、上衣の生地が暑苦しいのでセーラー形でない、薄手の生地を使った新形【どのようなものかは不明】との併用を認める…などの記録もあります。肝心のネクタイに関しては「白服ニハブリュー【ブルー】ノタイ、青服ニハレッド【レッド】タイノコト」とあります。

「東光」No.5（1966年12月）の「校服的の出来るころ」というエッセイには、「校服に決定とまではいかずに、紺地の生地で白線三本の衿の水兵服にエンジ色の三角ネクタイ」を着ていた上級生を見ていたけれども、やがて現在の紺のサージの

布地に金色の線、エンジ色のネクタイの制服が登場した変遷が語られています。

写真を検索してみると、1926年6月28日撮影の写真には、当時のハミルトン校長のまわりで見慣れない夏服を着た生徒たちが写っています。セーラー服のカラーや袖口には色がついており、白線が入り、ネクタイは三角タイのようです。モノクロ写真でわかりませんが、もしやこれがブルーのネクタイだったかもしれません。戦前の英和の生徒時代のお写真に、見慣れない制服の画像を発見したら史料室までご一報ください。



利用統計 (2018年10月～2019年3月)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		319	186	111	110	71	233
展示見学者区分	学内関係者	101	80	21	61	10	35
	一般	218	106	90	49	61	198
資料閲覧者数 (累計)		9	6	10	7	10	3
閲覧者区分	本学学生・生徒	1					
	現教職員	3	1	2	1		2
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者	4	1	1			
	同窓生 (研究者)						
	他校研究者・学生	1	3	4	5	10	1
利用の目的	一般		1	3	1		
	年史編集				1		
	著述・論文作成	1	3	4	5	10	
	伝記資料調査			3			
	記録類の調査・研究	4	1	1	1		1
	学院広報関係	3	1	1			
資料の種類 (重複あり)	その他	1	1	1			2
	東洋英和関係	8	5	9	7	8	3
	カナダの教会関係	1	1	1	1		
	村岡花子関係			1		2	
	周辺地域史			1			
その他							
月別レファレンス件数		14	12	2	3	3	5
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	9	4	1	1	2	1
	旧教職員						1
	同窓生・学院関係者	1	1				1
	同窓生 (研究者)						
	外部研究者・学生	1	3	1		1	2
	外部研究機関	1	3				
質問内容 (重複あり)	一般	2	1		2		
	資料所蔵調査	4	7	2	2	2	2
	写真所蔵調査	1					
	事項調査	11	6	2	3	2	2
その他		1				1	

史料室の活動より (2018年10月～2019年3月)

(☆は複数回)

2018年10月

- ・学院資料・村岡花子文庫展示コーナー企画展示設営
- ・第二回史料室委員会
- ・来室／調査—中高部母の会新聞部。楓祭50回の記事作成のため
- ・照会—高等部長より、東洋英和における日章旗掲揚、「君が代」斉唱について→戦前の式典資料や写真から日章旗を式典に飾り、「君が代」斉唱していたことを確認
- ・照会—海外研究者より『赤毛のアン』の初版本の発行日、印刷日について
- ・☆来室／調査—他大学学部生。「東洋英和ニュース」などを調査
- ・☆照会／資料提供—カナダ留学中の卒業生より、ミス・ハミルトンについて
- ・☆来室／調査—中中部部長。楓祭について
- ・団体見学—大田区郷土の会グループ、展示コーナーを見学
- ・来室／調査—高等部長。創立記念日のためミス・ハミルトンについて
- ・来室—中高部放送部。楓祭で展示コーナーの案内を放送するため、史料室スタッフにインタビュー
- ・10月13日 村岡花子記念講座 (佐佐木幸綱氏・村岡恵理氏)
- ・中高部楓祭 (10月19日・20日) に第50回を記念して出張展示
- ・調査—創立記念日11月6日の制定をめぐって資料収集
- ・執筆—楓園87号「史料室レター26」
- ・10月27日 村岡花子記念講座 (三枝昂之氏)
- ・照会—軽井沢で殺害されたキャンベル夫妻について→男性ミッシェンの会報誌でダニエル・ノルマンの追悼文を発見

2018年11月

- ・照会—他大学学部生より、ヴォーリス設計の寄宿舎について
- ・来室／調査—他大学教授。カナダにおける日系人強制収容所について
- ・照会—中高部教諭より、男子の東洋英和学校の神学部について
- ・「史料室だより」No.91 刊行
- ・小学部創立記念日礼拝にて、酒井ふみよ (前史料室担当) がお話し担当
- ・中高部教職員祈禱会にて、松本 (史料室) が感話担当
- ・照会—中中部部長より、三英和の校章について→山梨は、1935年

- 肩章制定時は別のもの (葉に7つの切れ込み)、1956年変更し現在のものに。静岡は1937年校章制定 (丸十字に富士)、創立80周年 (1967年) の後に「副章」として、二校と同じ形を制定
- ・来室／調査—本学教授。卒論指導のため片山廣子関連資料、『死生学年報』執筆のため塚本哲也元学長関連資料
- ・11月10日 (史料室: 松本・三笠) 楓美会25周年記念式参加
- ・11月17日 (史料室: 松本) 村岡花子記念講座担当
- ・撮影—学研。三笠書房のアンシリーズを撮影 (教科書掲載のため)
- ・研修— (史料室: 三笠) 国立女性教育会館「アーカイブズ保存修復研修 (基礎コース) + (実技コース)」
- ・来室／調査—齊藤康代氏 (元東京女子大学教授)。生涯学習センターWMS講座の準備のため松尾 (赤木) 芳子先生、丸山民子先生について
- ・☆周年行事検討会議参加 (史料室: 松本)
- ・来室—元関西学院大学学長井上琢智教授。『関西学院事典』編纂についてご教示いただく
- ・照会—学長より、石橋湛山と村岡花子・柳原白蓮について
- ・照会—村岡花子が指導していた小澁光発行の童話雑誌「夢の國」(夢の國社) に関連する資料について
- ・来室—深澤美恵子氏 (山梨英和史料室)。カナダ・メソジスト教会の資料などについてお話あり

2018年12月

- ・出張— (史料室: 松本・三笠) 12月5日 神戸女学院史料室ほか見学／12月6日 関西学院史研究会 (史料室: 松本発表)。学院史編纂室ほか見学
- ・12月8日 村岡花子記念講座 (佐藤智美副学長・村岡恵理氏)
- ・☆来室／調査—オックスフォード大学院生。戦前の三英和について
- ・来室／調査—関西学院大学卒業生。タイの王族の親戚が東洋英和の別科に在籍していたこと、安井てつ先生のタイでの女学校設立のことなど
- ・照会—中高部教諭より、小野徳三郎先生と英和のつながりについて
- ・来室／調査—中高部母の会会長。「虹」20周年記念号への寄稿にあたり、虹の会の歴史や母の会との関係について
- ・照会—Los Angeles Japanese Daily News (羅府新報) より、150年前にアメリカ本土に最初に入植した日本人移民団の一人で

ある卒業生の資料があるか→史料室の資料では確認できず

2019年1月

- ・中高部地歴部ボランティア。初期卒業生リストのデータ化、「校友会誌」・「楓」の保存封筒入れ、史料室パンフレットの訂正シール貼りなど
- ・照会—5年ごとの周年行事の根拠は→『東洋英和女学院 資料集第3号』（1987）54～55頁。ブラックモアが創立記念日11月6日の由来、5年ごとに周年行事を行っていく方針を書いている
- ・第三回史料室委員会
- ・幼稚園つばみ会にて、酒井ふみよ（前史料室担当）がお話担当
- ・来室／調査—社会福祉法人 愛隣団スタッフ。愛清館、ミス・アレンのことなど
- ・1月26日（史料室：松本・三笠）大学院開設25周年記念式典参加
- ・研修—（史料室：松本・三笠）大学図書館問題研究会「大学アーカイブズの理念と活動・実践～東北大学史料館を事例に～」
- ・来室／調査—本学教授。「初期スクラップブック」ほか
- ・来室—元同窓会会長。桜プロジェクト5周年ツアーについて相談
- ・来訪／見学—駐カナダ全権特命大使 石兼公博氏来校。村岡姉妹とともに展示コーナーを見学

2019年2月

- ・☆来室／調査—神戸大学大学院留学生。日加関係について
- ・☆来室／調査—他校研究者。村岡花子関係資料
- ・見学—調査・研究中のオックスフォード大学院生を中高部第一応接室、大講堂、メモリアルチャペルなどに案内

2019年3月

- ・画像借用—山梨県立文学館 村岡花子短歌関係（4点）
- ・出張—（史料室：松本）昭和館開館20周年記念オールヒストリー特別上映会「仲代達矢さんの証言映像」に参加。仲代氏の恩師として元小学部長江良頭三郎先生が紹介されている
- ・照会—海外研究者より、ハミルトン校長の戦前のノートについて
- ・執筆—楓園88号「史料室レター27」
- ・2018年度第1回『英和事典（仮）』編集委員会
- ・『東洋英和女学院資料集第6号 村岡花子文庫と書目録』刊行
- ・『カナダ婦人宣教師物語』改訂第1刷刊行
- ・村岡花子蔵書のカビ、エタノール消毒作業完了
- ・研修—（史料室：松本・三笠）大学史資料協議会研究会 帝国データバンク史料館見学
- ・研修—（史料室：松本）伊藤長七研究フォーラム（府立第五中学校初代校長の伊藤は13年間東洋英和女学校に講師として勤務）
- ・港区麻布未来写真館展示設営
- ・来室—NHK担当者。カナダの日系人収容所における東洋英和の婦人宣教師の活動を紹介する番組企画について
- ・団体見学—日本万歩クラブ、展示コーナーを見学
- ・校正—「楓園」88号、「大学案内 2020」年表ページ
- ・来室／調査—他校研究者。幼児教育における音楽教育について
- ・執筆—「東光」No.55 史料室パート執筆



史料室を訪れる若き研究者たち(上)



中高部地歴部ボランティア(右)

【おもな移管資料】

- ・生涯学習センターより、2017年・2018年度村岡花子記念講座資料
- ・管財課より、大学開学前の大学校地整備の写真、野尻のアルバム
- ・小学部より、「小羊」No.50,52各1冊（史料室欠号分）ほか
- ・中高部より、2009年度楓祭パンフレット（史料室欠号分）ほか

【おもな受贈資料】

- ・戦前期からのアルバム3冊、写真多数、バッジ
- ・戦前期の写真7点、「The Life of Christ」（本）
- ・大学のチャペルのマークが入った半袖Tシャツ（職員に配布されたもの）
- ・中高部母の会テニスクラブより「英和くまちゃん（楓祭の母の会チャリティーバザーにて販売）」
- ・松尾芳子先生関係資料
- ・保育部会同窓会資料数点
- ・大学初期卒業生より、大学関連写真、資料数点
- ・元中高部教諭より、中高部ワンダーフォーゲル部『創立25周年記念 1986』
- ・虹の会20周年記念誌寄稿文
- ・「岩本典子の半生記」
- ・大正8年卒業生の資料5点（「大正四年七月 夏休日記」ほか）
- ・台志古満寿氏（明治38年卒業。元教員）のアルバム

（書籍）

- ・ジェニー牛山（高等部卒）『ジェニー牛山先生の美と健康のレシピ』（講談社）
- ・『千葉本町教会八十年史 羔幼稚園と共に』
- ・『関西学院大学絵画部弦月会創立100周年記念誌』
- ・『軽井沢彫家具』（軽井沢町商工会）
- ・秋谷美保子『片山廣子全歌集』（現代短歌社）
- ・白蓮『几帳のかけ』（大正8年刊）
- ・近藤聡乃（高等部卒）『ニューヨークで考え中 ②』（亜紀書房）
- ・『キープへの道』（立教大学出版会）
- ・高澤紀恵・山崎鋼介『建築家ヴォーリズの「夢」』（勉誠出版）
- ・増山かおり『死ぬまでに一度は訪ねたい東京の文学館』（エクスタレッジ。取材協力、展示コーナー掲載）
- ・『全国作家記念館ガイド』（山川出版社。取材協力、展示コーナー掲載）
- ・藤原葵「野に放たれた虎—戦後初の女性県会議員・中西タキノ」（『阿波魂をつなぐ』所収。村岡花子とのつながりに言及）
- ・お茶の水女子大学『女性リーダー育成のために』（勁草書房。池田守男元理事長・院長による講演記録所収）
- ・『代田教会八十年年譜』
- ・川崎司『清冽な水脈 透谷・愛山・明石・坎堂』（三弥井書店。画像提供）
- ・歌川光一『女子のたしなみと日本近代 音楽文化にみる「趣味」の受容』（勁草書房。調査協力）
- ・姜奉植編著『淵澤能恵研究』（淵澤能恵は初期の教員、齋藤春子とのつながりあり。調査協力）
- ・『関西学院史紀要 第25号』（史料室：松本発表記録掲載）

（論文）

- ・野尻美枝氏（立教女学院短期大学准教授）「昭和初期における「お話」をめぐる保育観」立教女学院短期大学紀要50巻（2018年）
- ・舟木てるみ氏（短期大学英文科卒、高千穂大学准教授）「明治期の東洋英和女学校における英語教育」高千穂論叢第52巻第4号（2018年2月）

【おもな画像データ・資料提供】

- ・「楓園」87・88号のため、画像多数
- ・中高部聖書科へ、王女会、永坂孤女院など画像10点
- ・大学へ、画像約200点（周年事業のため）
- ・大学院へ、全画像17点（周年事業のため）
- ・生涯学習センターへ、村岡花子画像16点
- ・他校研究者へ、片山廣子の画像4点（研究書出版のため）
- ・山口朝日放送等へ、村岡花子関係の画像3点

◆ 既刊の「史料室だより」も読めます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。

「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

◆ 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp